

【随筆】

初夏はどんな花が？

住 吉 尚

(釧路支部)

先月の私の話の中でハクガンの増加が異常だと書きましたが、こんな事情があるということです。先ず、日本に渡って来ていたハクガンは一度絶滅してしまいました。それで、これを復活させるためにウランゲル島で繁殖しているハクガンの卵を採卵して、日本に渡ってくるマガンに抱かせると言う方法を使ったとのこと。これはガン類の渡りが本能ではなく、親が子に教えることによって渡る場所を覚えると言うことから、マガンにこれを託したわけです。採卵場所はベーリング海峡とカムチャッカ半島の付け根との中間付近です。これで日本に渡ってくるマガンの群れの中に少しずつハクガンが見られるようになりました。マガンに育てられてもハクガンは見た目が違うマガンとはつがいにならず、ハクガン同士でつがいとなり、このマガンの繁殖地でハクガンが繁殖し始めました。ここのハクガンがある程度増えると、ウランゲル島からアメリカ大陸を南下する群れがこのマガンの繁殖地を通って行くため、中には日本に渡る群れに混ざって一緒に渡る個体が出て、更にこれらの個体とつがいができることにより、増々日本に渡る個体が増えると言うことになっているとのことでした。なおハクガンは世界的には数が少ない種ではありません。生息数は数十万羽とされています。

さてもう6月、季節はもう初夏ですね。自然界では5月から6月のこの時期が一年で最も変化の大きな季節でしょう。5月中旬にはまだ春の山菜であるタラの芽を採ったりしていましたが、もう葉が伸びて食用には向きませんね。葉が出るのが遅いミズナラなども葉が伸び始めて森が緑で覆われて行きます。私が札幌にいた頃はライラックの花が咲き、カッコウが鳴くと春は終わり、もう初夏と言う気分でしたが、最近カッコウの声がさっぱり聞こえませんね。そしてもうひとつ気になるのは、あのうるさいほど鳴いているはずのオオジシギの声もさっぱり聞こえません。春に南から渡ってくる鳥たちは緑の葉が邪魔をするので姿があまり見えませんが、最近極端に数が減っているのです。カッコウやツツドリのように他の鳥に托卵する鳥は、托卵相手が繁殖を始めて

から托卵するわけですから、他の夏鳥より少し遅く渡ってくるのですが、それにしても今年はまだ一度もカッコウもツツドリもその声を聞いていません。オオジシギは牧草の早刈りが始まってから急に少なくなったような気がしています。以前は牧草地がオオジシギの格好の繁殖場所だったのですがね。天然記念物だ！希少種だ！という種はそれなりに数を維持していますが、その他大勢の夏鳥は人知れず消えて行きそうな気配があり、恐ろしいことになりそうな気がします。カッコウの仲間は他の鳥があまり食べない大型の毛虫類をよく捕食しています。そのため、これらの鳥がいなくなると毛虫天国になる可能性があります。冬に渡ってくる水鳥は最近では高病原性鳥インフルエンザウイルスの運び屋として大変注目されていますね。これらの鳥でもインフルエンザを発症して死ぬものも多いのでしょうか、日本に渡って来て来る種では生息数に影響が出るほどのことにはなっていません。これに対して、夏に渡ってくる鳥たちの生息数の変化は、日本の自然環境にどんな影響出て来るのか？私は大きな危機感を抱いています。これらの鳥は夏の森でたくさん昆虫を食べてくれていたのですから。

タンチョウはヒナが孵ってどんどん大きくなっています。写真は5月22日に私が今年初めて見た3家族のヒナの中で最も小さなヒナです。大きなヒナは頭が親鳥の腹に届くほどでした。でも国道脇だったので写真を撮るために停車することができず諦め、次のヒナは私が車を止めるとさっさとヤブに消え、結局このヒナだけが写真になりました。



5月22日に見たタンチョウのヒナ

5月27日はNPO法人タンチョウ保護研究グループの理事会があり、3年ぶり？4年ぶり？でしょうか、ICFのジョージ・アーチボルト氏にお会いしました。理事会の中で彼は日本のタンチョウの生息数が頭打ちになって



アーチボルト氏と私

いるとの理事長の説明には疑問がある。死亡数があまり変わらず、繁殖成績もあまり変わらないのであれば、必ず増加しているはずだ！と言います。この見方は私の考えと一致しています。私は理事でないのでこの場面では発言しませんでした。タンチョウのカウント調査に参加している理事は理事長だけです。そして彼は調査時にはリーダーですから、調査員の指揮を執っています。一方、私はただの調査員ですからあちこち見て歩きます。この中で、私は最近特に農家周りのタンチョウが増え、カウントが大変難しくなっているのを肌で感じています。そうなんです、近年数え落としが急激に増えている、と言う感じを強く持っているのです。タンチョウ保護研究グループの公式見解では、今年のタンチョウの生息数は1,850羽前後と言うことですが、私は2,000羽を越しているだろうと思っています。ジョージ・アーチボルト氏とは前はトランプとミニトランプの話で盛り上がりました。今年は28日に彼は韓国に行き、その後はモンゴルでICFの有力寄付者相手に野生のツル類の観察ツアーをやるのだとか。我々は28日がタンチョウ保護研究グループの総会でした。とは言え、私はこのグループの会員でもましてや理事でもありません。外部監査と言うのでしょうか。奇妙な格好でくっ付いていますが、会員以上に会には貢献はしているつもりです。6月末には今年もタンチョウの捕獲作業が待っていますね。1年なんて早いものです。歳を取るほどに1年が早くなると言いますが、なるほどと思う今日この頃です。

さて今日は、でしょうか？今日も、でしょうか？浜中方面にカレイ釣りに行きました。でも釣れるのは小型なコマイばかりです。釣っては放し、釣っては放し、していましたが、気が変わって20 cmを超えるものは少し持って帰ろうか！とキープし始め、結局カレイを3匹と

コマイを15匹キープして帰ることに。ここからさらに走って霧多布市街地で昼を食べ、湿原道路を通って帰ることにしました。これが6月2日、湿原はワタスゲの白いぼんぼりでおおわれています。車を降り、湿原に入るとワタスゲの白、そしてクシロハナシノブの薄い水色、さらにはハクサンチドリの濃いピンクと色とりどりの花が見られました。ただ、どの花も背丈が低いので遠目には目立ちません。ここでひとつ。ワタスゲの白いぼんぼりは花ではありません。種を飛ばすための綿毛で、タンポポの綿毛と同じものです。と言うことはタンポポの花が咲く頃、ワタスゲも花を咲かせていて、タンポポが綿毛になった頃、ワタスゲも綿毛になるということですが、この綿毛はタンポポより少し長くかかって種が成熟するためか、白が目立つ期間がタンポポより長いので目立つのでしょうか。

庭のクロフネツジの下に何か花を植えたいと妻が言います。日陰でも良い花ですから、例えばシラネアオイなどはどうだろう？と私。妻は早速近所の花屋へ。気に入ったと！早速1株を買ってきて植えました。シラネア



クシロハナシノブ



ハクサンチドリ



ワタスゲ

オイはアネモネに近い植物で、1属1種の日本だけに自生する植物です。日光白根山からその名が付いた高山植物ですから暑さには弱いので涼しい場所を好みます。私はこの薄い水色の花が大好きです。花びらはガクで4片あり、オオバナノエンレイソウの花びらより大きいほどです。この花は私が若かりし頃に住んでいた登別に近いオロフレ峠に大群落がありました。今ではどうなっているでしょうね。翌日は釧路獣医師会の総会です。会場はいつも車でいっぱいですから少し早めに行くことに。すると入ってすぐの所で、釧路山草会が花を並べていました。ここでは私が初めて見るような、各種のアツモリソウの仲間が展示されており、面白く見学させていただきました。植物図鑑を並べて説明している人がいて、私に「この図鑑が今テレビでやっている牧野富太郎の図鑑です」と。見ると牧野図鑑の復刻版です。私が「私は牧野図鑑の初版本を持っていますよ！」と。彼は羨ましそうに初版本には最後尾に発行部数番号が記されていると言います。牧野図鑑の初版本は昭和15年発行で皇紀2600年記念と書いてあります。この本は私の父が求めたもので、父は若い頃牧野の台湾採集旅行に同行したと言う話が自慢でした。私は自分の本にそんな番号があるのは知りませんでしたので、帰って早速確認をしました。ありました。私が持っているものは4606とあります。昭和15年と言えば日中戦争の真ただ中、翌年には太平洋戦争が始まるという時です。この時父は山口県で中学の教師をやっていたはずですが、その後何度も引っ越ししたのですが、この図鑑は大事に持って歩いたのでしょう。私は小さな時からいつもこの図鑑を見ていたので今ではもうボロボロです。私は牧野図鑑で植物を覚えましたが、今でもカラーの植物図鑑は苦手です。ましてや写真で見せる最近の図鑑ではさっぱりです。これは例えば葉に毛が生えてい

るとか、その毛が一本ずつだとか、数本束になっているとか、が正確に描かれているから分かりやすいのです。でも難しい漢字とカタカナで書かれた図鑑を小学校の時から見ていたのですが、中の文章はさっぱりわからず今でも難解です。でも初めて見た花を、あの図鑑のどの辺で見たあの花に違いない！と思ったりしたものでした。皆が漫画を見ている時に変な図鑑ばかり見ていたのですから、当然のごとくに変な大人になり、今では変な爺さんになったのはそのせいでしょうか。

(現代漢詩)
過疎の謎
金食う家畜
その証は怪物
畜主は怪物
資本景気

水無月は
願望それとも
現実か
古人に質疑
この気候

コロナ明け
無病息災
祈願転じて
バカ騒ぎ
ワクチンマスクで
猛暑入り

脳衰大臣
偽憂乳ちじい
(帯広市)

(句題) 炎天

「老鶯や
いまだ独り身恋の唄」

「吸殻で蟻の入口除草剤」

「刈られ草
生きておるぞと
臭ひはつ」

(室蘭市 白波瀬 稔歳)